

会報

No. 98

平成30(2018)年3月15日

http://www.library.pref.kyoto.jp/?page_id=28

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町

京都府立図書館内

TEL (075) 762-4655

<目次>

1面

・宮津市立図書館が商業施設内にオープンしました
(宮津市立図書館)

2～3面

・実務研修会実施報告
・北部研修参加報告
・南部研修参加報告

4面

・大学図書館との連携
(府立図書館)
・京都府図書館等連絡協議会事業

宮津市立図書館が 商業施設内に オープンしました

宮津市立図書館長 岡本 知子

平成二十九年十一月二十七日、宮津阪急ビル（宮津シーサイドマートミツプル）三階に移転オープンしました。

「学びと育ちを支える図書館」・「市民に役立つ図書館」・「出会いのある図書館」・「市民が利用しやすい図書館」の四つを基本目標に、今までの約四倍の面積で広く明るい図書館に生まれ変わりました。児童書からビジネス本に至るまでの新刊図書約一万五千冊、前尾記念文庫の蔵書約二万九千冊、宮津ロータリークラブから寄贈の四百二冊を加え、約十五万六千冊の充実したライナップでスタートしました。また、開館時間を午後八時まで延長するとともに、インターネット予約も始めました。

府北部の図書館で商業施設内に開館するのは当市が初めてです。商業施設との複合化の利点として、まちの中心的施設としてにぎわいの拠点となり、買い物ついでに立ち寄っていただきたい、駐車場も確保できることから、集客力の向上や商業施設及び周辺施設と連携したイベント・企画展等を開催できると考えられます。

子育て支援施設も同じ商業施設内に整備されたことにより、子育て世代や就学前児童の来館も従前に比べてかなり増えています。今後は子育て支援施設と連携して事業展開もしていきたいと考えています。

課題として、児童・生徒指導上、ゲームセンターや商業施設等への立ち入りが懸念されることです。

次に、図書館のニューコーナーを中心に御紹介します。子育て支援・観光・ビジネス支援・ヤングアダルトコーナーを新たに設置。その他に前尾記念文庫コーナー（故前尾繁三郎元衆議院議長が寄贈された貴重な蔵書の閲覧・貸出）や郷土・地域・行政資料コーナー、おはなしコーナー、AVコーナー、新聞雑誌コーナー、静寂学習コーナー、対面朗読室を設置。また、畳敷きになつていくつろぎコーナーは、静かなゆつたりとした空間の中で読書を楽しんでいただけます。

昨年十一月のオープンから、一日平均約百四十九人の貸出人数で、旧図書館時代の二倍以上の一日平均約八百人を超える来館者に利用いただいております。状況を呈しています。

今後も図書館サービスの充実に努め、市民に愛される図書館づくりを進めてまいりますので、新しく生まれ変わった宮津市立図書館をよろしくお願いたします。



児童コーナー



くつろぎコーナー

開館時間・午前十時～午後八時
休館日・月曜日

（祝日のときはその翌日）
毎月最終木曜日

（祝日のときはその翌日）
年末年始

（十二月二十九日～一月三日）
特別整理期間

実務研修会実施報告

◎北部会場

「乳幼児とわらべうた―実践と理論―」

日程 平成二十九年

十一月三十日(木)

場所 宮津市福祉・教育総合プラザ

講師 落合 美知子氏

(「おはなしとおんがくの

ちいさいおうち」主宰)

◎中部会場

「京都学・歴史館の目指すもの」

日程 平成二十九年十月六日(金)

場所 京都府立京都学・歴史館

講師 金田 章裕氏

(京都府立京都学・歴史館館長)

概要 京都学・歴史館について、京都

学の推進や古文書、行政文書に

触れながら解説

◎南部会場

「未就学児へのおはなし会の本の選び

方・すすめ方」

日程 平成二十九年

十一月十六日(木)

場所 京田辺市立中央図書館

講師 川上 博幸氏

(元枚方市立図書館職員)

北部研修参加報告

綾部市図書館 後藤 裕美

私自身これまでいろいろな方法でのおはなし会を実践してきましたが、わらべうたについてはほとんど知らず、「わらべうた」と聞くと、「ちよつと古いのでは」「今時の親子に受け入れられるの?」という印象を持っていました。しかし今回、テーマに興味をひかれ半信半疑の気持ちで参加したところ目からうろこで、「わらべうたって楽しい!」「もつとたくさん知りたい!」と、とても感動しました。

落合さんは『子どもの図書館』(石井桃子/著 岩波書店)を読み、本と出会い成長していく子どもの姿に感動し、子どもと本を繋ぐ図書館員になれたそうです。図書館を退職後も様々な場所で子どもが本に出会う活動をしてこられ、現在は地元の図書館員として子どもの読書環境づくりをされています。

前半は、今乳幼児が置かれている読書環境について御自身の経験をもとに分かりやすく講演いただきました。「図書館は言葉の宝庫であり、本に出会って、感じて、体験して、心が豊かになる。そのことが子どもにとって生きる力になる」ということでした。

平成二年以降、言葉を獲得する成長

過程にある乳幼児が、図書館のおはなし会に参加するようになってきたそうです。そこで、まだ言葉の意味も分からない乳幼児に何をしたらよいのかというところで、おはなし会でわらべうたを取り入れる図書館が増えたそうです。

「スマホに子守りをさせないで」といわれるぐらい電子メディアとの関係が問題となっており、「機械に育てられている」ような子どもも多いようです。しかし、機械は人の肉声とは違い一方的で、対話するということがありません。「最近では感情を表に出さない、出せない子どもが増えているように感じる」と言われていたのが印象的でした。わらべうたを知らない世代の私たちに、わらべうたは昔のもので、どちらかという古くて地味なイメージがあります。今なぜわらべうたなのかと感じる方も多いのではないのでしょうか。

赤ちゃんはまず、誕生してからおうちの人と触れ合い目と目を合わせて語りかけることにより言葉を獲得していきます。子どもと本との関係は、いきなり絵本の読み聞かせから始まるわけではなく、発達段階に応じて「わらべうたでの触れ合い」↓絵本の読み聞かせ↓おはなしの語り↓本」という流れをとります。子どもと肉声で歌い、読み、語ることで、想像力が豊かになり、物語が生まれます。

わらべうたの良い点は、言葉と歌と

遊びの三つが融合されているということです。目を合わせること、リズムに合わせることで、体に触れることが同時にできます。同じ言葉を語るのでも、ちよつとリズムを付けたら、簡単な音階で歌うことで子どもの心に響きます。子どもは相手の目を見て、愛されているということを実感する。ボディタッチで触れ合うことにより肌で感じる。そして、いろいろな言葉に出会い、楽しく遊ぶ。言葉を獲得する過程にある乳幼児にとって、わらべうたに触れることはとても良いということでした。

後半はおはなし会の実践体験で



講演の様子

くまの人形を赤ちゃんに見立て、人差し指を使いながら、「♪ととけつこうくよがあけたく♪」と歌うところから始まったのですが、落合さんが突然歌い出したにも関わらず、半分以上の参加者が一緒に口ずさみ始め、私の知らない間にリハーサルが行われていたのかと思うぐらい一体感があってびっくりしてしまいました。

た。ほかにも「おちゃをのみにきてください」・「ここはとうちゃんにんどころ」などたくさんわらべうたを実践しました。隣の人と目と目を合わせて時々指でつついたりして。大人同士なので初めはちよつと恥ずかしかったり顔を赤らめたりもしましたが、お互いの名前を呼び合ったり、一緒にやっているうちに楽しくなり、夢中になつてしまいました。歌詞もメロディーも知らない歌もあつたのですが、一度歌うとすぐに覚えてしまい、その日の夜、お風呂の中でもつい口ずさんでしまうほどでした。

わらべうたは、一音か三音でメロディーが構成されていて、繰り返しが多く、誰でも歌いやすくできているそうです。子どもは繰り返しが大好きです。おはなし会で、「常に新しいネタを考えない」と職員がプロレシヤールを感じることもありますが、子どもは好きなことや楽しいことは何度やっても好きだし楽しいようです。



おはなし会の実践体験の様子

絵本を読むときの工夫も紹介していただきました。本を入れてある鞆に向かって「でてこーい！」と何度も呼びかけます。何がでてくるのだろうか？早く出てきて！とワクワク！そして、出てきたのが、『でてこい でてこい』（林明子／作・絵 福音館書店）の絵本でした。現物の絵本がない状態から読み聞かせが始まっていたのです。続いて、『もこもこもこ』（谷川俊太郎／作 元永定正／絵 文研出版）の読み聞かせ。この絵本は言葉を絵で表現されていて面白いということ

で紹介され、読む対象によって全く違う反応が見られるということでした。また、小物使いについても楽しい紹介がありました。両手をたまごのようにまるく合わせて、「♪にーぎりぱちり たてよこひよこ♪」そして、ぴよぴよよくと言いなながら手を開くと：そこにはひよこちゃんがい！実は、黄色いハンカチが丸まって入っていたのです！手を開いた瞬間、ハンカチがふわつと動いて本当にひよこが出てきたように見えました。子どもならもうひよこにしか見えなんでしょうね！何が出てくるんだろうというこのワクワク感がたまらなく楽しく、とても参考にになりました。

最近のおはなし会では0歳児でも月齢の低い乳幼児の参加が多くなってきており、月齢による発育の状態の違い

も知っておく必要があるということでした。特に首が据わるまではあまりゆさぶつてはいけません。例えば太ももの上に乗せた子どもを、太ももを開いてその間にストンと落とす遊びは、0歳児はしてはいけません。舟こぎをする遊びなど腕を引っ張るときも強く引つばると子どもの腕が抜けてしまうなど、保護者自身にも注意を呼び掛けないと事故につながりうるため、そうした注意すべき事柄をよく知っておくことが大事だということでした。

この研修を通して、メディアの発達などで便利になった半面、人と人とのつながりが希薄になっていく今、目を見て、肉声で語りかけることの大切さを学びました。今後、乳幼児だけでなく保護者にも目を見て語りかける大切さを伝えていきたいと思っております。また、わらべうたの持つ力の凄さと誰にでもできる手軽さも勉強になりました。知っていたら誰でもすぐに使えるわらべうた。「わらべうたをおはなし会に」と気負わずにいろんな場面で見えるのではないのでしょうか。今後、日々のフロアワークにおいても、子どもの目を見て話しかける、あいさつにリズムを付けてみたり、ぐずっている子どもをわらべうたであやしてみたり、コミュニケーションを図る手段としても取り入れていきたいと思えます。研修終了後、オープンしたばかりの

宮津市立図書館の見学会に参加しました。閲覧スペースは、高すぎない書架が並び、奥まで見通すことのできる広い空間でした。休館日ということで、館内全体をくまなく案内してもらい、バックヤードの事務室や書庫等も全て見学させていただきました。ありがとうございました。

南部研修参加報告

長岡京市立図書館 川瀬 如世

内容を決める第一回委員会の段階から、どのように絵本を選べば良いのか、より意義のあるおはなし会にするには何が必要なのか、興味をお持ちの方も多く、私自身もとても楽しみにしていた研修でした。

はじめに、おはなし会のやり方から御説明がありました。とにかく経験を積むこと、子どもとの相性が重要であることなどを伺い、私自身がリラックとした状態で子どもたちに向き合えるよう、練習あるのみだと改めて感じました。また、子どもたちと面識がない場合は冒頭になぞなぞ等を行って気持ちをほぐすところから始めるなど、臨機応変な対応ができるよう心がけたいです。

「おはなし会」とはストーリーテリングを主として指し、「読み聞かせ」

大学図書館との連携

京都府立図書館 島村 聡明

とは別の部類であることなどを初めて知り、これまで何気なく「おはなし会」という名称を使って行事を進めていましたが、私の頭の中で定義が整理されました。以前は「ストーリーテリングができない者は図書館員とは呼ばない」という考え方があったと伺い、身の引き締まる思いがしました。現在、厳密に分けて行事として開催している館がどれほどあるかは分かりませんが、しつかりと意識しておきたいことのひとつです。先生が、時々具体例や書名を挙げながら御説明くださったため、終始とても理解しやすかったのですが、中でも特に印象に残ったのは、「図書館員に自信がないからこそ、たくさんのお本を紹介してしまう」「中学生に『おおきなかぶ』をおすすめ本としては選ばないように、それぞれの特性を見極めて本を選ぶ」というお言葉でした。まさにそのとおりだと感じました。私自身、レファレンスを受けた際、内容よりも数をそろえがちな面があるので、今後は少しでも意識して厳選できるようにしたいと思います。

今回の研修は本当に内容が濃く、先生の児童サービスに対する熱いお気持ちも相まって、二時間があっという間に過ぎました。今後の業務に携わるにあたり、今回の研修を改めてじっくりかみ砕きながら理解を深められるようにしたいと思います。

京都府図書館総合目録ネットワーク(K-Libnet)には、平成十三年度の運営開始当初から京都学園大学図書館が参加され、これまで府内の図書館等と活発な相互貸借を行ってこられました。京都府立図書館では、平成二十七年

度末に策定したサービス計画にのっとり、この輪をさらに広げ、大学図書館が持つ専門的な資料を一般市民が活用でき、また、大学の学生や教員が、自校の図書館で公立図書館ならではの資料が利用できるよう、K-Libnetへの連携・参加大学を増やしています。

このような流れは、普段、大学の図書館を利用することができない一般の利用者や、研究機関に属さない研究者にとつて、非常に意味のあることだと思えます。また、大学側にとつても、公立図書館ならではの資料が利用できるだけでなく、「地域貢献」という運営上の要請にも合致しているように思われます。

ただ、以前からも、府内の公立図書館と近隣の大学との連携を図る例はいくつかありました。冒頭で言及した京都学園大学図書館は、平成八年という早い時期に、亀岡市立図書館、美山町立図書館(現南丹市)と「亀岡市図書館情報ネットワーク

クシステム」を構築されていました。これは、三館の蔵書約三十二万冊を総目録に登録し、オンラインによる相互貸借を実現するというものでした。K-Libnetの立ち上げに伴い、同ネットワークがそのままK-Libnetに引き継がれたため、同大学が大学図書館としては唯一、当初からK-Libnetに参加されているという経緯があります。

平成二十四年四月からは、宇治市図書館が、同じく宇治市にある京都文教大学図書館・京都文教短期大学図書館と連携協力を始められました。連携内容は、資料の相互貸借にとどまらず、宇治市図書館の利用カードで大学・短期大学図書館への入館及び図書・雑誌・新聞等の閲覧が無料できるといったものです(十八歳以上、館内利用のみ)。さらに、大学図書館側で宇治市図書館での予約図書を受け取ることができます。

また、平成二十九年には、京都市図書館と京都市立芸術大学付属図書館が相互貸借サービスを開始されました。こちらも館外への貸出はできませんが、双方の本を取り寄せて利用が可能です。さらに、福知山公立大学メディアセンターと福知山市立図書館の間でも、平成三十年四月から、相互利用の推進を図る取組が予定されています。

K-Libnetにおける大学図書館との連携について、市町村巡回等でみなさまの御感想を伺っていると、借受先の

選択肢が増えるという喜びの一方、やはり、館外への貸出ができないため、お断りになる利用者も多いと聞いております。いづれにせよ、府内の公立図書館等と大学の連携は緒に就いたばかりですので、みなさまの御協力を得ながら、さらに充実した事業としていきたいと考えています。

平成二十九年年度後期

京都府図書館等連絡協議会事業

【後期の開催実績】

平成二十九年十一月五日(日)

第六回子ども読書本のしおりコンテンツ表彰式(府教委との共催事業)(ルビノ京都堀川)

〈実務研修会：2面参照〉

平成二十九年十二月十三日(水)

第二回広報委員会

平成三十年二月二十八日(水)

相互協力実務担当者会議

(府立図書館)

【今後の予定】

平成三十年三月(予定)

第二回理事会(府立図書館)

Ⅱ会報をホームページに掲載Ⅱ

第九十八号を、京都府図書館等連絡協議会のホームページ(URLは一

面参照)に全文掲載しています。